

令和4年5月5日発行(毎月5日1回発行)  
第62巻5月号(通巻734号)

# 風土



5

## 石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

### 吾子に役付く左義長の場固め

(句集『竹取』より昭和三十六年作)

「左義長」は一月十五日に行われる正月行事で、それぞれの家に来てもらった正月の神を、火を焚いて送ります。人々は注連飾りや書初めを持ち寄り、「どんと、どんと」と囃しながら燃やすのです。桂郎師の住む鶴川村で、左義長の準備が始まりました。その準備作業に吾子の役割が付いたのです。役が付き、吾子が村の子どもとして認められたのです。余所者として村人へ疎外感を持っていた桂郎師にはうれしい限りです。

### 露の火葬場最少の火を母へ擦る

(句集『竹取』より昭和三十六年作)

桂郎師の母キヨは、結核のため、この年の七月に亡くなっています。桂郎師が父の理髪店をやむなく継いだ後も、文学好きの青年桂郎を支えてくれた母でした。この頃は、桂郎師の職も安定せず経済的に苦しい時代でした。桂郎師は、母の遺体をリヤカーに乗せて火葬場まで運んだと書かれています。そして母を焼く最初の火も桂郎師が入れたと。「最少の火」とはマッチの火のことです。桂郎師は、儂さの秋の季語「露」を取って使って母を弔っています。

## 神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

### 桂郎のこゑのとんだる大根引く

(句集『月虹』より平成二十一年作)

器師はこの年八十二歳になっています。桂郎師が亡くなったのは昭和五十年の六十七歳ですので、ずいぶんと桂郎師の年齢を超えてしまいました。それでも折に触れて桂郎師の声がよみがえります。畑で誰か大根を引いているのを見たのでしょうか。器師はたちどころに、桂郎師の「大根引く音の不思議に時すこす」を思い起こしました。この句については、桂郎師から直接何度も聞かされています。その声がありありと聞こえるのです。

### 金輪際十夜の綱を握りしむ

(句集『月虹』より平成二十一年作)

「十夜」は、京都の真如堂で行われる浄土宗の念仏法要のことです。現在は十一月五日から十五日までの十日間法要が行われます。この間を善男善女が集いお参りをします。境内には本常の阿弥陀如来とつながる綱が掛かり、これを掴むと、阿弥陀様のご利益が得られると信じられ、誰もが掴みます。その掴む様子を、「金輪際」と置きました。「金輪際」とは無限に深い意から、とことんまで握りしめる様子に用いられています。

# 山の雨

# 南うみを

待春の日差しを撥ねて鍬と鎌  
追儼待つ丹波大粒豆一斗  
春浅き若狭の雪の横なぐり  
春泥の長靴混んで集会所  
また別の鳥の来てゐる雪間かな  
うすらひの騒ぎだしたる鯉の波  
光りつつ消えつつ春の雪しづり  
浮鴨をしづかに濡らし春の雪  
朝日子につぎつぎ目覚めいぬふぐり  
図書館のおほきな玻璃戸木の根開く  
蜷の池法事嫌ひの子がしやがむ  
末黒野の煤跳ねあげて山の雨



# 竹間集

同人作品



春 愁 山田 暢子

三寒や生きてワクチン三回目  
星霜の中にわれ置き月冴ゆる  
雛段を飾りしことも遙かな日  
三月や俄にふへし鳥の声  
春愁や新聞ひろげ爪を切る  
春眠や亡きひとたちに囲まるる  
晩年と書いて消したり春燈下

雪 解 田中佐知子

椎茸の菌打つ響き雪解かな  
斑雪野や双体神は抱擁す  
野焼の火あらぬ方より立ちにけり  
あはうみの野焼見し夜の雨の音  
引鴨や湖へせり出す浮御堂  
瞳を入れてこけし息づく雪解かな  
彫り上がる仏の素肌あたたかし

修羅の火 中村 洋子

殉教の島に咲き継ぐ紅椿  
白梅の白の輝よふ利休の忌  
春北風鎧ひしままの土偶かな  
デフォルメの裸婦の油彩画冴返る  
大いなる海の落日実朝忌  
末黒野の変はる地の色水の色  
修羅の火の匂ひの残る焼野かな

野 火 岩木 茂

寒造り根雪の山の聳えけり  
撫牛のやうな背をして梅探る  
牧場へはみ出す野火を叩き消し  
こんと鳴く影絵遊びの冬障子  
けあらしや小舟の漁る湾の緑  
雪解靄北山杉に立ち籠むる  
漂着の瓶に手紙や涅槃西風

春吹雪 小林 輝子

寒紅を指すに小指を些と汚す  
寒芹田濁す媼の合羽赤  
立春は暦の上や雲厚く  
仏壇にバレンタインのチョコレート  
容赦なく家に入り込む春吹雪  
春寒や明日入院と友のこゑ  
玄関にあらせいとうの香り満つ

菜の花 橋添やよひ

梅の沙汰リモートで来る二月かな  
初蝶ハルノテやそは納言かも式部かも  
美人水舐園に湧きて牡丹雪  
手の指の強張りなだめ春寒し  
涅槃図の巻き皺嘆き深めたる  
大国の野望の戦火冴え返る  
菜の花や降りる子のなき縄電車

末黒野 浅田 光代

叫びとも違ふ芽吹きハルノテの雑木山  
神木の紙垂のちぎれて鳥の恋  
掌の窪に受くふるさとの花菜漬  
語り尽くせしとき梅の花匂ふ  
一木のすすき吹かるる大焼野  
末黒野を行けば土竜塚降々  
末黒野や大いなる日を吸ひつくし

背山

柿沼 盟子

四温晴れ鳥語は高く長くなり  
春節や蒸籠の湯気の盛大に  
沈丁花開く朝の晴れわたり  
含みたる泡よりとけて薄氷  
梅咲いて背山にぎにぎしくなりぬ  
一列に山を向きをり干蝶  
噛み合はせ狂ふファスナー春遅々と

笹鳴き

高村 令予

笹鳴きや里に日溜り風溜り  
挫折とは次なる力冬木の芽  
犬ふぐりリズム忘れし水車小舎  
大入り日ふらこの児に蹴飛ばされ  
初蝶や舞ふに日射しのまだ足りぬ  
生かされて生きて文書く春灯下  
無人駅墨絵ぼかしの春入り日

うぐひす餅

土井 三乙

日捲りをめぐり忘れて二月なり  
鬼の豆打つ振りのみに済ましけり  
薄氷の顛未知るや池の鯉  
チヨコレートの箱開けをれば春の雪  
一札に過ぐる野仏春浅し  
襟立てて渡る木橋や猫柳  
うぐひす餅女子校そばの和菓子店

雀の子

林 いづみ

はこべらや子等は母の手奪ひあふ  
深く入る里にぬた場や座禅草  
はららごの透くまで災る干蝶  
卒業子抱へしギター掻き鳴らす  
あなたぬし苺贈らば苺来て  
ものの芽にそそぐ雨脚あすは晴  
ひと雨の土の機嫌や雀の子

# 山河集

同人作品



南うみを選

蜷の道日暮忘れてあたりけり  
春潮の押し寄す長谷の観世音  
頬刺や路面電車を横に見て  
五色椿かさなり合うて何思はん  
立春や柵を越えたる水しぶき

雨宮 桂子

鴨帰る硝子泛子吊る舟屋カフェ  
くろぐると楓の走り根ぼたん雪  
汽水湖のあをめる日なりいぬふぐり  
つややかに日照雨に濡れて牡丹の芽  
映画跳ね潮の匂ひや鳥雲に

小原美美子

鎌倉に真つ赤なフェラーリ実朝忌  
ごつごつと木肌の乾く余寒かな  
青空に和紙漉くやうに春の雲

森田 節子

稲荷社へ斜面明るくいぬふぐり  
しぶき上げ水車は春の音こぼす

杉本薬王子

境内に赤きポルシェと水仙花  
傘を打つ雨音すでに春の音  
穂の芽を並べて山の無人駅  
大根を提げて梅林通り抜け  
寒鯉の目覚めて髭の太さかな

菅原 末野

多喜二忌の枯野静かに騒ぎをり  
斯くも静かに斯くも明らか蜷の道  
春水や緩び初めたる蛇籠の目  
惜春やハーブ抱きて少女来る  
猫八に昭和に遠き初音かな

# 風土独語／南 うみを



高原での所産であろうか。「春暖炉」に目を止めた。薪の数も少なく燃えている。それを「たひらに焼べて」と表現し、「春暖炉」の本意を挿んでいる。

蜷の道日暮忘れてゐたりけり 雨宮 桂子

大根を提げて梅林通り抜け 杉本葉王子

この句の読みのポイントは「日暮忘れて」にある。一つは作者が我を忘れて「蜷の道」に見入り、日暮れてしまったという読み。もう一つは蜷がひたすら道を作り続けて、日暮れてしまったという読みである。二つの読みを絡ませた巧みな措辞である。

みしみしと霜夜の両手伸びまさる 磯崎 啓三

この作者は五感全体で、対象を捉えようとする。作者は今、「霜夜」と向き合っている。霜の降る闇の中で「みしみし」は、家の締まる音であり、作者の骨が軋む音でもある。そして「両手伸びまさる」のである。この感覚は原初的なものと言える。

汽水湖のあをめる日なりいぬふぐり 小原美美子

「汽水湖」と「いぬふぐり」の取り合わせ。「いぬふぐり」は春の先駆けの花だ。その頃の「汽水湖」の色を「あをめる」と描いた。淡水湖ではない湖の早春の色合いが捉えられている。

春暖炉薪をたひらに焼べてあり 森田 節子

「春暖炉」は冬のように一日中新を焚くわけではない。北国が、

「梅林」と「大根」の意外なものを組み合わせて成功している。この場合の「大根」はその頃の季物として、主季語は「梅林」となる。誰もが通れる梅林なのだ。それにしても可笑しい。

オルゴール幾度も回す雛祭 石井美智子

この句も「雛祭」の本意から少し離れた世界を提示している。雛人形には目もくれず、幼児がオルゴールの曲を何度も聴いているのである。これも微笑ましい。

斯くも静かに斯くも明らか蜷の道 菅原 末野

先ほどの「蜷の道」と違い、この句は正攻法で、「蜷の道」と対峙した。「静かに」は蜷の見えざる動きを、「明らか」は、見えざる動きの現れを簡潔に示す。「斯くも」は作者の驚きである。

霾や魁夷の駱駝歩み出す 川田 好子

「霾」はモンゴルや中国北部の黄土地帯に春に発生する。この句は、その発生現場へ想像力を飛ばし、東山魁夷の駱駝の絵と重ねた。その景がありありと目の前に見える。

## 風土集



## 南うみを選

みしみしと霜夜の両手伸びまさる 三豊 磯崎 啓三

仏飯の固まつてゆくさむさかな

誰もぬ座敷の闇の寒さかな

月光のキンキンと鳴る寒さかな

ひとり身の夜に米とぐさむさかな

炒豆を飯に炊き込み春立つ日 川崎 森田 節子

梅日和酢のほんのりと手まり寿司

ウイーン菓子工房屋根に黄水仙

春暖炉薪をたひらに焼べてあり

オルゴール幾度も回す雛祭 秋田 石井美智子

雛の宴吸物椀に始まりぬ

毛氈の畳に垂れて春の燭

伽羅焚くや緩き着付けの雛の夜

指まるく鶯餅を摘まむかな

春一番胸の扉を叩きすぐ 東京 川田 好子

地下出口啓蟄の人吐き出せり

霾や魁夷の駱駝歩み出す

穴道湖に舟影いくつ蜩搔く

軋ませて伸ばす椎骨寒明くる

ふり向ける菩薩がほして苗水仙 福生 雨宮 桂子

薄水やことば少なに立ち止まる

神饌に春大根の横たはる

落椿ため息ひとつ洩らしをり

紅梅やふいにとびだすひとりごと

かざしては透くるでもなく薄氷 高槻 六車 佳奈

如月の銀器のまどふ槌目かな

白梅の蕊をゆたかにひらきけり

箸先に残る野の香や花菜漬

咲きそろふすずしるの白すずな黄